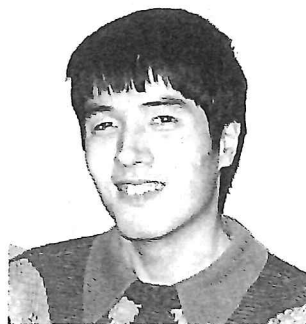


## 障害をこえて



東京都

福祉作業所通所生 野末 浩

僕は、「とくまる福祉作業所」に入所して、今年で、三年目になります。作業所に入る前は、こういう生活をおくっていました。うちで、ブラブラして、対人関係が弱かったので、家へ客が来ると、近くの図書館、近くの公園で、乞食みたいな生活をしていました。そこにいる人たちは、浮浪者ばかりで、すごいいやな感じがしました。しまいには、ドラ猫が、僕のそばによってきました。

三年前の夏、母の知り合いの紹介で、今の「とくまる福祉作業所」に入所しました。所長のM先生は、やさしい人でボクたちのことにいろいろ相談にのってくれる、お母さんみたいなやさしい人です。それから、ボクたちのよき相談相手である、Y先生、ふだんは、やさしいお姉さんのような人です。

ボクたちは、毎朝、近くの公園で、マラソンをします。とくまる福祉作業所は、ボクの入ったところは、「とうぶねりま（東武練馬）」にありましたが、今年の夏、「たかしまだいら（高島平）」に引っ越ししました。元気いっぱい、めだかのように、走りまわる仲間たち。みんな、それぞれの障害をこえた、こころのふれあい。見ていて、本当に楽しいものです。いつも大きい声で、野球の話をする、Y君。彼を先頭に、元気いっぱいの仲間たち。若さ、あふれる楽しいところです。今まで、僕は、心障者でしたが、そういう仲間に入る気になれませんでした。しかし、今一つの障害をこえて、新しいみちの出発点にたつたところです。（\*1、\*2は主催者が加筆しました）

さて、僕たちは、週三回、清掃をします。場所は、港区芝の芝公園です。時間は、あさ10時から2時ごろまでです。みんな、暑い中、一生けんめいにやっています。清掃の大好きなT君、いつも、ニコニコして、リヤカーをひいています。T君は、とてもおもしろいことを言ってくれます。他にボランティアのHさんというおじいさんが、手伝ってくれます。

清掃は、並の人では、できません。皆、力と頑張りと勇気で、困難にぶつかっていくのです。みんな、障害というものをこえて、自分たちの力を出しきって、清掃にいどみます。清掃は、本当によいことだと思います。今の東京の人は、清掃をほとんどしません。僕たちのやっていることは、よいことだと思います。りっぱな仕事だと思います。

僕たちの作業所は、清掃と作業とスポーツとレクリエーションと、いろいろなものがあります。障害者であるというよりも、人と人とのふれ合いをさまざまな障害というものの、なかで、やっているかのよう

に思います。

ところで、僕の障害は、知恵おくれで、手先が、不器用なことです。ひげも、それません。くつのひもも、むすべません。母の話によると、赤ちゃんの頃、はしかにかかったそうです。その後遺症で、頭の中にキズがあり、少し知恵おくれだそうです。それが、今になって、くやしいと思うところがあります。もし、それらが、できれば、どんなに充実した日々を過ごせたことでしょう。

あと、僕は、子供のころ、おとなしかったです。つまり、人と話すのが、苦手なお母さんっ子でした。僕が、「とくまる福祉作業所」に入った当時は、お母さんは、仕事をしていました。週3日、高島平で、体の不自由な子の世話をしていました。そういうとき、お母さんっ子の性格が、出てしまい、お母さんの仕事先まで、くっついていく日々が続きました。

「とくまる」に入った当時は、お母さん以外、話せる人がいませんでした。ある時、以前、通っていた施設の職員の人、話す人を見つけてあげようと言って、現在も通院している、精神科のN先生の病院に、カウンセリングという、話をしながら、治療したり、人間にめざめていくことをしてくれる先生を紹介してくれた。今から、5年前のことだ。僕は、障害者であるが、今まで、人と話したことは、なかった。そのカウンセリングの先生や「とくまる」に、最初のころは、非常にストレスを感じていた。しかし、今はちがう。時々、ストレスが、起きるが、自分なりに解決をするようになった。

最初のころは、「とくまる」に、異質なものを感じていた。しかし、同じ障害者の集まりだということ、わかってきた。「とくまる」に入ってから、僕は、以前と比べて、「おしゃべり」になったような気が、

がします。「とくまる」に入る前は、人とペラペラ、すずめのように、おしゃべりをしませんでした。しかし、今はちがいます。「とくまる」で、「おしゃべり」をすることによって、人というものが、わかり始めたような気がします。今でも仕事中、先生方に、「ノズエ君、おしゃべり、やめなさい」と注意される。しかし、それでも、僕はやめない。「とくまる」で、僕が、友だちと、「おしゃべり」をしなければ、僕の一日の活力の源とならない。おしゃべりから、始まって、友情の花は咲き始める。友だちと、「おしゃべり」するのは、僕の大好きなことである。おしゃべりは、本当に楽しいことだ。

障害をこえた、さまざまな人に出会える。そういう面で、福祉作業所は、人というものを知ったり、友だちをつくるということ、いいところだと思います。ある日、TVの公開の話したら、友だちが、興奮して、スタジオへ行きたいと言いました。友だちは、TVが友だちで、「とくまる」から帰ってくると、しょっちゅうテレビを見ているそうです。ボクなんか、図書館や神保町やいけぶくろに行きますが、友だちは、終わるまで、TVを見ているそうです。TVは、生きていくうえで、必要かもしれませんが、ボクたちみたいな若いうちは、TVを見ないで、運動した方が、いいと思います。友だちは、終わるまで、TVを見ているそうです。僕たち、障害者は、TVの番組を友だちとしてしています。TVばかり見ていたって、よくないと思います。

ボクたちの「とくまる福祉作業所」では、磁石の組立やコースターなどを作っています。みんな、一生けんめいがんばっています。本当にえらくて、すばらしい人たちだと思います。僕なんか、音をあげてしまうのに、みんな、一生けんめいに、がんばっています。みんな文句をいわず、やります。仕事が、仕

上がったたら、磁石を業者の人が、とりにきます。磁石の運びは、男の人の仕事で、みんな文句をいわず、やります。運ぶことに僕たちは、充実を感じます。

他にも、時計バンドの箱の製作などにとりくんでいます。僕たちは、与えられた仕事、一つ一つをやりとげます。やりとげることにより充実を覚えます。

最初の頃は、午後になると、仕事で、眠くなりました。急に、目のふちが、赤くなり、まぶたが、眠そうになるので。急に体の力がぬけて、眠気が、おそってくるのです。

昔、流行った歌よう曲、「授業中、天国だよ」という歌がありました。午後「とくまる福祉作業所」は、休けいときは、まさに天国そのもの。みんな冗談ばかり言ったり、好き勝手なことばかり言って、さわいでいます。僕たちにとって、「とくまる」の休けいじかんは、ディズニーランドのようなものです。

そして、その休けいじかんが終わり、再び、仕事へととつ入ります。その仕事、一つ一つ、丹念に、作り上げてきます。本当につらい仕事ですが、僕たちは、がんばります。仕事をやる時、みんなは、燃えています。仕事をみんなでやるということは、本当にすばらしいことです。僕たち、障害者は、その人なりのよさがあります。「とくまる」では、その人のよさを生かして、最大限に、ものごとをやりとげようとしています。仕事は、僕たちにとって、だいじなものです。その大切な仕事の一つ一つに、自分たちの生き方、障害をどのようにして、こえたかということを考えさせられるような気がします。仕事をがんばることによって、僕たちは、だんだん、成長するような気がしてならないのです。仕事をやりとげること

によって、いろいろな楽しみがあり、本当に毎日が、楽しいと思います。

次に今でも公園清掃は、いやになるときがあります。僕は、それをがまんして、今まで、やってきました。いやなことでも、がまんするところを僕は、公園清掃から、学びました。これをやったかやらないかで、友だちのみる目が、ちがってきます。やらないと、小づかいが、へってしまいます。だから、みんな、必死で、公園清掃に全力をつくして、がんばるのです。みな、これで得たものをたいせつにするのです。公園清掃は、大切なものであり、「とくまる」の仕事の中で、一番大切なものとして位置づけられています。

さて、ボクたちの作業所には、さまざまな、障害を持った人がいます。ダウン症の人もいます。しかし、みな障害をのりこえて、いろいろなことに、チャレンジしています。障害を持ったからって、恥ずかしがることはありません。僕たちのように、広いところと大きなユメを持ち、つねに明るさを失わず、いつも明るく振るまうことを忘れない。これは、とてもよいことです。ふつうの人では、できないことだと思いません。明るく、振るまうということ。

僕たちの作業所は、「たかしまだいら」に移ってから、大きく変わりました。つまり、よりチームワークのよさが、証明されたということ。僕たちは、みな、それぞれ、希望を秘めて、生きています。「とくまる作業所」の人たちは、スポーツが、大好きです。友だちの中には、スポーツをやりたいと言っている人がたくさんいます。作業所でも、スポーツは、やっています。昼休み近くの公園で。主に、野球をします。野球しているときは、みな、生き生きとした目をしています。しかし、時々、仕事上の都

合上、外に出られないときがあります。

僕たちは、遊びも仕事も同じくらい、がんばっています。それらを両立させて、いろいろなこと、いろいろな遊び、たとえば、半年前から、ユニホックをやっています。みんな、ユニホックをやっているとき、真剣、そのもの目つきで、がんばります。ユニホックは、障害と関係なく、楽しめるスポーツで、僕たちは、ユニホックを通じて、友情を深めます。障害者でも、やればできるということを証明してくれます。ユニホックこそ、僕が、もったも、苦手とする、友だちとのふれあいをおしえてくれました。今になって、ユニホックは、僕にとって、楽しみなものの一つです。チームを組んで、楽しいゲームをするということは、「とくまる」に入ってよかったなと思っています。僕は、ユニホックを通じて、友だちというものを作り障害をこえた、新しい人たちのふれあいというものができあがったと思います。

障害をこえた 野末 浩  
僕は、「とくまる福祉作業所」に入所して、今年で、三年目に及びます。作業所に入る前は、このように生活をおくっていました。うちが、ブラブラして、対人関係が弱かったのが、家へ客が来ると、近くの図書館で公園で、包みきれいな生活をしていました。そんなにいる人たちは、経験者ばかりで、すごいいいな感じになりました。しまいは、ドラ猫が、僕のそばに寄りついてきます。三年前の夏、母の知り合いの紹介で、今の「とくまる福祉作業所」に入所しました。所長の川先生は、やさしい人だから、お母さんや友だちのよき相談相手がある、先生、お母さん、やさしいお姉さんのような人だから、お母さんや友だちは、毎朝、近くの公園で、このようにしています。とくまる福祉作業所は、お母さんや友だちからは、「とくまる」にありましたが、今年夏、おかしな感じがして、

野末さんから寄せられた原稿



僕は、愛の手帳4度ですが、4度に負けず、できる限り、自分のできること、楽しいことは、やってみたいと思います。たとえば、愛の手帳4度でも、これからも、いろいろなことにチャレンジしてゆきたいと思います。障害に負けず、いろいろなことにチャレンジして、将来は、チャレンジャーの宇宙飛行士の毛利まもるさん、みたいな人になりたいと思います。障害に負けず、がんばりたいと思います。(完)

野末 浩

昭和三十九年生まれ 東京都板橋区にある

とくまる福祉作業所に通所中

東京都板橋区

### 選評

野末さんの文章を読み進むうちに、毎日の生活の様子についての物凄いリアリティ(現実感)に、ぐいぐいと引きこまれた。手書きの懸命な文字がそのリアリティを一層強烈にしている。お母さんとしか話せなかった野末さんが、「とくまる福祉作業所」に入ってから「おしゃべり」を一日の活力源とするようになり、しかも作業や公園の清掃を一つ一つやりとげることによって充実感を感じるようになったという。そして、がんばるみんなを「えらくてすばらしい人だ」と評する野末さん、あなたはすばらしい青年だ。

(柳田邦男)